

・学校名及び規模

館山市立第二中学校						
	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	5	5	2	16	32
生徒数	151	170	159	9	489	

・実践研究の概要（主題（テ・マ）及び設定の趣旨）

・主題（テ・マ）

『基礎的・基本的な学習事項を身につけ、自己実現の図れる生徒』の育成
～ 個に応じた指導法の工夫・改善と、互いに高め合える集団の形成の方法を探る ～

・主題設定の趣旨

本校では平成5年度以来学校教育目標を、生涯学習の基礎づくりを担うという考えのもと、次のように定めてきた。

『社会の変化に自ら対応し、逞しく生き抜いていける生徒の育成』
また具体目標を、平成12年度より次のように設定した。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> (1) 基礎的・基本的内容を身に付け問題解決力を養おう (2) 思いやりの心と素直な心をもとう (3) 自分の目標実現に立ち向かう気力を持ち続けよう (4) 健康で逞しい身体をつくろう |
|---|

分析的な具体目標は、まさに新学習指導要領において育成が求められている「生きる力」の要素そのものであると考えている。

この教育目標の具現に向け、本校なりの特色ある教育課程を編成し、取り組み成果を上げてきたと考えるが、このような中で、明らかになってきた課題は、教科指導における基礎・基本の定着の徹底と、問題解決力の育成に関する具体的な方法及び条件整備についての再検討の必要性である。

近年、生徒個々の違いが多様化、拡大化してきていることで、個に応じた指導の重要性が一層増していると言える。このような認識のもと、これまで本校が培ってきた教育課程のよさを生かしながら、今明らかになってきた課題解決に向けて本主題を設定した。

・実践研究の内容について

() 研究体制の工夫

- ・ 研究推進委員会〔校長、教頭、教務主任、研究主任、研究推進委員（2名）〕
- ・ 各教科サ・クル〔各教科主任及び教科部員〕
- ・ 学級集団づくり部会〔各学年及び研究推進委員会より担当者1名（4名）〕

() 実践研究の内容（ 児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善の実践例）

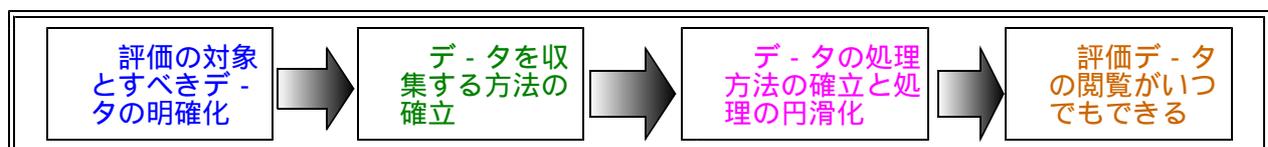
絶対評価規準・基準の整備と、指導方法の改善を図るための準備

校内LANに結ばれたコンピュータを活用した評価活動の推進

基礎的・基本的事項の定着の度合いを計り、その結果をもとに指導の工夫改善を図るには、そのための条件や環境を整備する必要がある。

そこで本校では、校内LANで結ばれたコンピュータを使用し、評価の対象となるデータを収集したら、随時、入力・分析し、いつでも閲覧・活用のできるシステムを構築した。

そのシステムの構築は、次のような考えの流れをふんだ。



評価の対象とすべきデータの明確化

本校では、年間指導計画の指導内容を各観点ごとの評価規準の形にした。そして、それを

日々の評価活動で活用する「評価補助簿」の評価規準項目とリンクさせる形でコンピュータ上のファイルとして作成した。<資料・>
 こうすることで、指導計画を閲覧する時に、何を身につけさせ、何を評価していくのかということが同時に分かるようになっている。

<資料 年間指導計画>



<資料 評価補助簿の評価規準項目>



デ - タを収集する方法の確立

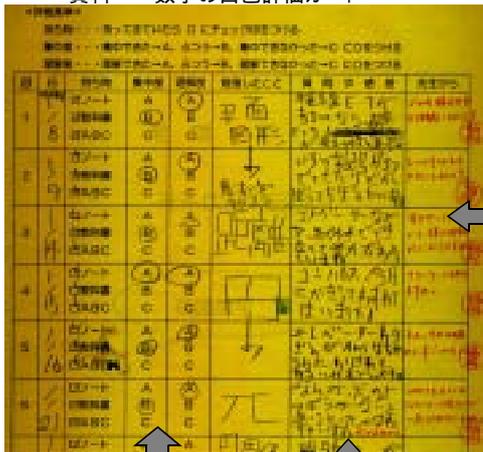
学習の定着度をできるだけ正確にとらえるには、生徒が取り組む様々な学習内容や形態に対応して、各観点を分析的にとらえるための評価方法が求められる。

現在、本校では、評価方法については教師個人に任される部分が多いので、今後教科サークルや全校で検討していく必要がある。

また、教師のみの評価では、独りよがりになりかねない。生徒の自己評価の結果をどう評価デ - タとして生かしていくかについても研究を重ねたい。

下の資料は、評価デ - タとして活用している生徒の自己評価カ - ドの事例である。

<資料 数学の自己評価カ - ド>

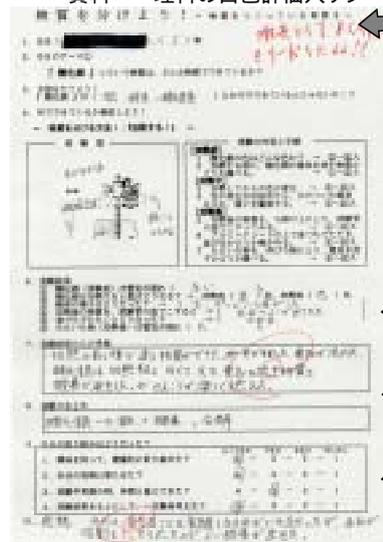


集中度・理解度についての自己評価の欄

質問や感想の欄

教師の一言!

<資料 理科の自己評価入りワークシート>



教師の一言!

以下、本時のねらいについての項目を聞く。

しっかり実験ができたか

しっかり考察しているか

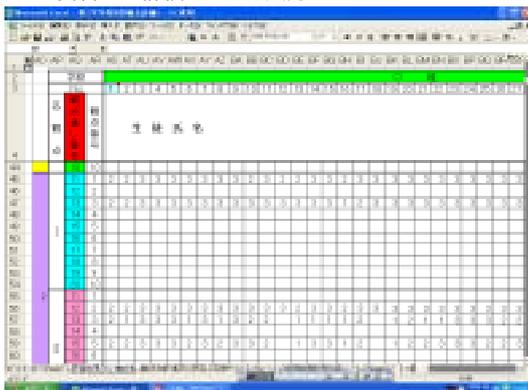
自己評価の項目

デ - タの処理方法の確立と処理の円滑化

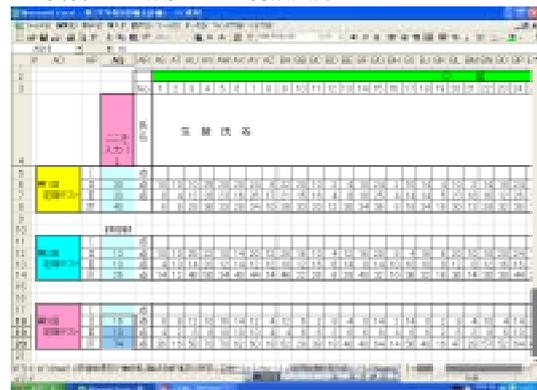
生徒の学習状況を随時知ることができるようには、評価デ - タの処理をできるだけ円滑にしていく必要がある。

本校ではコンピュータを使って、校内で定めた絶対評価の考え方の道筋にしたがって様々な評価デ - タをリンクさせ、いつでも評価結果が得られるようになっている。

<資料 評価デ - タの入力カシ - ト>



<資料 定期テストの得点入力カシ - ト>





指導方法の工夫改善を図るには、生徒の学習事項の定着度を表す評価結果が手元にある必要がある。

本校では、「評価データの入力シート」(資料)に授業やワークシート等から得たデータを入力し、判定したい項目の範囲を指定するだけで、その間の評価結果が一覧として返される(資料)。

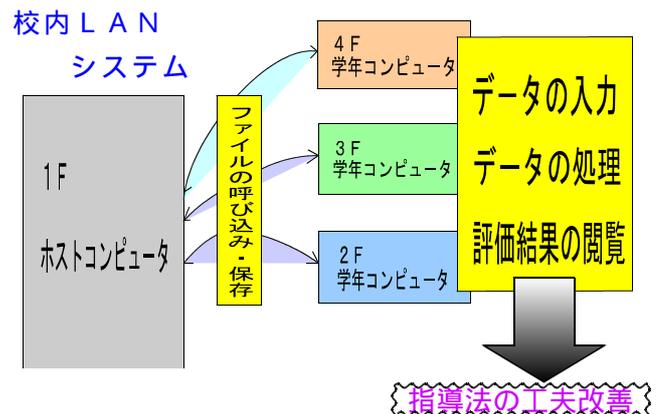
また定期テストの得点もシート(資料)に入力すると、普段の評価データと併せて評価結果を得ることができる。

評価データの閲覧がいつでもできる

評価を指導方法の工夫改善に役立てるには、評価データや処理の結果等が活用したいときに、いつでも閲覧できるようにする必要がある。

前述したように、本校では、校内LANにより、1F教務室に設置してあるホストコンピュータと各階の学年職員室及び教師個人のコンピュータが結ばれている。

そこで、ホストコンピュータ内に評価データの処理用ファイルを置くことで、校内LANに接続されたコンピュータから、いつでもアクセスし、各教科の評価結果が閲覧できるような形に構築した。



() 成果と課題

前述してきたように、本年度は評価データの処理システムの完成に努めてきた。今後、指導と評価の一体化を一層推進していくには、以下のことに重点をおいた研究を進めていきたい。

生徒の自己評価を生かした評価活動の充実

- ・ 教師のみの目で得た評価データでは、教師の独りよがりな指導の改善になるおそれがある。そこで、生徒の目から見て、また感じた授業の状況を評価データとして持ち、分析的にとらえていく必要がある。
- ・ どうしたら生徒の側のデータを的確に吸い上げられるか、自己評価カード等の中身を工夫していく必要がある。

個に応じた指導の工夫改善を図るために、教科サ・クル内での評価データをもとにした検討会を更に充実させる必要がある。

() 成果の普及方策

本年度は、本校における実践を、学区小学校の先生方に参観していただく機会を設定した。今後も、こうした取り組みを続けていきたい。

平成14年度の「研究のまとめ」を作成し、本校の研究実践を学区小学校に紹介する。